

## わが国のスミス研究史に関する覚え書：『本邦アダム・スミス文献』読後感

著者	杉原 四郎
雑誌名	關西大學經濟論集
巻	6
号	4
ページ	277-295
発行年	1956-07-01
その他のタイトル	A Note on Bibliography of Adam Smith in Japan
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/15713">http://hdl.handle.net/10112/15713</a>

# わが國のスマミス研究史に関する覚え書

——『本邦アダム・スマミス文献』読後感——

杉原四郎

## はしがき

昭和三十年十二月、弘文堂から、「アダム・スマシスの会」編の『本邦アダム・スマミス文献—目録および解題—』が刊行された。<sup>(1)</sup>「アダム・スマシスの会」というのは、その代表者である矢内原忠雄氏が、本書の序でのべているように、昭和二十四年の秋に発足した、わが國のスマミス愛好者五十名のつどいであるが、この会が共同研究をすすめるうちに、今後の研究の方途を正しく設定するためには、どうしてもこれまでの内外の学界が到達したスマミス理解の水準を明かにしておくことが不可欠の前提であるという結論に達し、そのための第一の仕事として、わが國におけるスマミス研究文献の総括的な目録の作製をこの会で行うことが決定された。そこで昭和二十六年の春、目録編集委員会が設けられ、以後、大河内一男、田添京二の両氏を中心とし、東大経済学部を拠点とし、「アダム・スマシスの会」の会員のみならず全国のスマミス研究者、大学および附属図書館の協力をえて、文献の検索・蒐集・整理という、地味な、だがすくなくならぬ労苦を要する作業がすすめられた。その結果、足かけ五年の歳月をついやして、よ

わが国のスミス研究史に関する覚え書（杉原）

二

うやく完成したのが本書である。

本書は、スミスの著書の邦訳、スミスに関する単行本と雑誌論文とはもちろん、学説史、論文集、辞典その他の一章一項目から、新聞論評や学会記事に至るまで、およそスミスについての文献にして、明治初年から昭和二十七年までのあいだにわが国で公刊されたもの、項目にして約七百余点を収録、これを年次順に配列し、必要な項目には簡単な註乃至は備考をつけるとともに、特に重要な文献については、詳細な解題を附して利用者の便宜をはかっている。これまでもわが国のスミス文献をまとめる試みがないではなかつたけれども、収録文献の数量において、周到適切な解説において、本書は、従来のもものと比較にならない充実した内容をもっている。<sup>(2)</sup> スミスにかぎらず、一般にこれまで外国の一個人に関してつくられた邦文文献目録で、これほど大がかりに作業がおこなわれ、又その成果が単行本で公刊されたということは、おそらく他に類例があるまいから、わが国の経済学研究史上のみならず、書誌学史的にも、本書の刊行はきわめて注目されるべきことであるといわなければならない。

専門のスミス研究者でもない私が、とくに本書に興味をもつたのは、第一に、かつてJ・S・ミルについての邦文文献の蒐集をこころみ、最近マックス・ウェーバーに関する邦文文献目録の作成に関与した経験から、この種の仕事にとまなう諸困難がよく実感されるのだが、ミルやウェーバーよりも一層スケールの大きいスミスについて、どのような方法にしたがつて仕事すすめられたのか、また実際の程度まで完璧なものをつくりあげることができたらうか、この点を本書について吟味することは、今後われわれが文献目録を作成乃至は利用する場合、大いに参考となるにちがいないと考えたからであるが、第二に、ヨリ大きな理由として、本書は、純学術的な研究文献のみならず、啓蒙的随想的文章や新聞論評にいたるまで、スミスに関するすべての文献を網羅する方針をとると同時

に、重要な文献には、それが発表された当時の社会情勢や、筆者の問題意識にまで立ち入った解題をつけることによつて、近代日本という特殊なタイプをもつたこの後進資本主義社会に、いかにスミスが移入され、消化され、その結果、国際的に見てもきわめて高度の研究水準がうちたてられるにいたつたのかというプロセスを解明するに不可欠な基礎資料を提供しているのであるが、このことは、本書が、複雑な構造をもつわが国の近代思想史を解明する一つの鍵としても利用されうることを意味するのではないか、と思つたからである。近代日本の社会経済思想史の中枢部を縦貫するいわばスミス山脈の偉容を、本書によつて展望することは、この方面に興味をもつものにとつて、大きな魅力であるといわなければならない。以下はこうした観点から本書をひもといた私の読後感をとりまとめたものである。<sup>(3)</sup>

註(1) 本書における単行本の記載の形式にならつて本書自身の体裁を記せばつぎのごとくなる。

アダム・スミスの会編 本邦アダム・スミス文献―目録および解題 弘文堂 昭和三十年十二月 序五頁・凡例一頁・

目次六頁・本文二七頁 A5 一冊

備考 写真 石川暎作訳『富国論』第一巻のタイトルページ。スミスの肖像二葉。

- (2) 本書が、文献の蒐集に際してみずからとつた方法を説明するとともに、なお不十分だつたと反省される諸点を指摘し、〔序〕、さらに直接原本にあたりえなかつたものはすべて明記して将来の補正を期している(「凡例」の七参照)ことは、われわれに大いに参考になると同時に、本書に対する信頼感をかえつて高めさせる。内容を検討してわたくしの感じた望蜀の念に関し、個々の点については、以下において具体的に指摘してゆくことにするが、全体としては、何よりも、分類乃至人名索引をつけてほしかつたと思う。これによつて、本書の利用価値が倍加するのみならず、本書になお残存するケアレスな不備の多く――たとえば太田可夫氏や高島壽哉氏の論文が大正期に掲載され、前者は重複している(本書七六・八三・一四八頁参照)ごとき――が容易に発見・防止されたことであらう。

- (3) 本書におくられること三ヶ月にして、天野敬太郎編著『河上肇博士文献志』(日本評論新社)が公刊されたが、この書物

わが国のスミス研究史に関する覚え書（杉原）

四

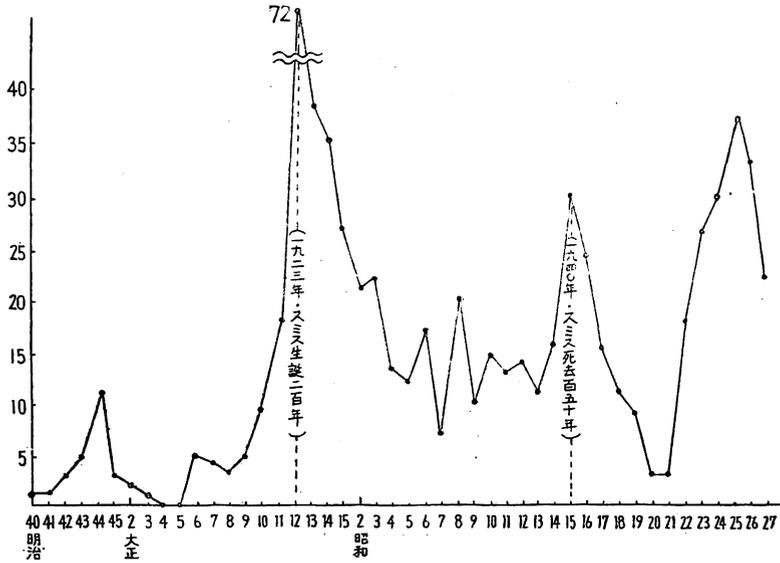
は、ここにのべた書誌学的ならびに思想的な二つの観点からみて、まさに本書と好一对の対照的乃至補完的な内容をそなえている。私は、この書物を併読することによつて、本書に対する興味を一そうふかめられた。たとえば、本稿の二で多少立ち入つて見るように、大正期の河上博士は、スミスに関する多くの労作を発表している―それは、河上肇博士文献誌の巻末にある人名索引のスミスの項から、容易に検出することができる―が、それらがわが国のスミス研究史上いかなる位置をしめるかを考える上に、本書は、好適な資料を提供している―とくに河上博士の二著に対する住谷氏の解題（本書四九―五二、一〇五―七頁）参照―し、また、大正末期の注目すべきスミス研究の多くが、当時のマルクス経済学に関する諸論争と関連をもつていたのである（本書八四・九六頁における遊部・田添両氏の指摘を参照）が、河上博士がその重要なメンバーの一人であつた当時の諸論争の展望をえるには、『河上肇博士文献誌』―とくに「六・論争目録」を参照―が、大いに参考となる、といつた具合である。

一

明治大正昭和の三代にわたるスミス研究の系譜を本書によつてあとづけてゆくと、われわれは、そこに、わが国の経済学の発展のあとが、さらにはその背景としての社会思想の変遷のあとが、基礎過程の急速な展開を反映しつつ、集中的に表現されていることに気づかせられる。本書によれば、年次順にかかげられる文献は明治二年が初発であつて、以後年々若干の關係文献が公刊されてゆくのであるが、明治の三十年代までは、さすがに文献数もきわめてわずかで、かかげるべき文献のまつたくない年もすくなくない。そこで、まず明治四十年から昭和二十七年までの各年における文献数の消長をグラフでしめし、全体の展望をあらかじめおいて、つぎに、明治、大正、昭和の三部にわけ、それぞれの時期における研究を、本書にしたがつて概観しつつ、若干の感想を附記してゆくことにしよう。

まず明治期であるが、この時期をさらに三期、すなわち、二十年までを初期、四十年までを中期、以後を後期に

わが国のスミス研究史に関する覚え書（杉原）



わけて見ると、（A）まず明治二十年までの初期にぞくする文献でかかげられているもの計十六、うち『国富論』の翻譯関係五点をのぞけば、ほとんどすべてがスミスに關説する一部をふくむ啓蒙的な洋書の翻譯であり、この種のもは尙他にもかぞえ上げられることは、堀経夫教授の解題「明治初期の経済学文献に現われたアダム・スミス」によつてしることが出来る。その上われわれは、この解題によつて、この期の前半における群小の経済学書を通じてのスミスに關する知識の普及を前提として、「明治十年以後ともなれば、スミスの学説や思想は、ただにそれを紹介した著書またはその邦訳によつてばかりではなく、直接にスミスの原著またはその邦訳によつて理解されるようになり、また邦人の多くの論著の中で取扱われるようになってきた」（六頁）こと、そして、スミス学説移植の中心人物だつた福沢諭吉とならんで、スミス思想——とくに自由貿易論——利用の代表者として田口卯吉の名前がクローズアップされてくることをも、

わが国のスミス研究史に関する覚え書(杉原)

六

同時にまなぶことができる。さらに視野をひろげて、一方、堀博士の『明治経済学史』や本庄栄治郎、加田哲二両氏等の文献学的研究やによつて、当時のわが国の経済思想の全般をうかがうとともに、他方、欧米諸国とくにドイツにおけるイギリス古典経済学移入の歴史(1)をこれに対照するなら、「マルクスは、ドイツについて、経済学はドイツから見て『外国科学』であつたと言つた。このことは、日本にもあてはまるであらうか？私の見るところで、日本にとつては、経済学は、『外国科学』ではなかつた。それは、外国俗流経済学であつた。……日本は、イギリス資本主義の古典的發展をも知らなかつたように、経済学の古典時代をも知らずに通過した。当面の必要は、イギリス古典経済学をも、フランス古典経済学をも、顧みるいとまを与えず、目前の最新式経済学を手近かに輸入しなければならなかつた。古典経済学者のほんやくは、明治時代にはアダム・スミスに限られていた……。フランス、程度は劣るがドイツとはちがつて、日本は、スミスから直接の影響をうけなかつたのである」という大塚金之助氏の覚え書(2)から多くの示唆をくみとることができるであらう。ところでその翻譯については、三辺清一郎氏の「国富論の邦訳について」という解題が詳説しているように、石川映作の手により、明治十五年から公刊されはじめ、後には嵯峨正作の助力をえて、ついに明治二十一年にその全訳の刊行を見るにいたつた。石川映作が、この大著の翻譯を、ほとんど独力で、しかも当時としてはきわめて良心的に遂行するために(3)、その仕事に精力をかたむけつくし、二十八才で病没したことはないが、魯迅も歎賞する日本人の勤勉の一証としてまことに敬服にあたいする(中国で戦後による翻譯『原富』が出るのはこれより十三年おくれで一九〇一年『明治三十四年である)。われわれは、この訳者が塾にまなんで福沢諭吉の教えをうけた人であり、その翻譯書が外ならぬ田口卯吉の手によつて刊行されたことが、決して偶然ではなかつたことを知ると同時に、石川のこの壮挙が、前掲大塚氏の所説が示している

ように、たとえただちには大きな影響力をもちえなかつたにせよ、後年のめざましい成果をあげるわが国のスミス研究に対する最初の礎石をおいたものとして、その歴史的意義を十分高く評価すべきであろう。(B) つぎに二十一年—四十年の中期に入つてすぐ気がつくことは、かかげられている文献の数が、かえつて減少している—前期の十六対してわずかに八—ということである。この点については、つぎの二つの理由が考えられよう。まず第一に、基本的には自由民権運動の終熄と、明治政府の基礎確立とにともない、わが国の文化は、一般に、従来の英仏のそれを重視する方向から、ドイツに範をとる方向に転換してゆくのであるが、経済思想の分野においても事情は同様で、あたかもこの頃ようやくその端緒をききつつあつた講壇経済学—ことに官学のそれ—は、主としてドイツの新歴史学派に追隨するにいたるとともに、之に対抗すべき在野の経済思想も、福沢の思想がしめしているように、二十年代以降は漸次国家主義的色彩をつよめて行つたということ、そしてこのような思想的变化は、わが国のブルジュアジーが、その後、進性の故に、上からの保護を必要としたと同時に、その急進性の故に、いちはやく社会主義思想に対する脅威を感じざるをえなかつたことの反映にほかならない、ということこれである。しかし第二に、この場合つぎの事情も考慮されてよいであろう。それは、明治期の社会経済思想の研究が、従来、初期に関する文献の基礎研究がかなりすすんでいるのに対し、中期については、若干のモノグラフィがあるだけで、<sup>(6)</sup> 全般的な研究が立ちおくれている現状である反面、この時期に至ると社会科学関係の学会誌や評論誌も統々発刊され、<sup>(7)</sup> 経済学に関する単行本も初期にくらべてずつと増加している筈であるから、たとえ基本的には第一にのべた事情があるにせよ、将来この時期についての研究がすすめられるにしたがつて、スミス関係の文献も追加されるであろうことは十分予想される、という点である。この点に関して本書でとくに感ぜられるのは、明治二十年に出た阪谷芳郎述『経済学史講義』

わが国のスミス研究史に関する覚え書(杉原)

八

から、大正九年の河上肇『近世経済思想史論』にいたるまで、スミスに閲読した経済学史が一冊もあげられていないというところで、この間のギャップが文献的に多少とも本書によつてうずめられていたら、という感じを禁じえなかつた。(C)最後に四十一年以後の後期について注目される点は、第一に、自ら新歴史学派に直接まなびながら、その理論的不毛性を鋭く認識していた福田徳三によつて、スミスの経済理論に関する論文―「マルクスの不変、可変資本とスミスの固定、流通資本との関係に就ての研究」―がわが国ではじめて発表された(四十二年)<sup>(8)</sup>こと、第二にアシュレー版の『国富論』抄本が、三上正毅の手によつて譚訳され(四十三年)、スミスの学説の普及を大いに助けたこと、第三に、慶応の図書館が『国富論』の原諸版を蒐めたのを機会に、三田学会雑誌がスミス記念号を刊行した(四十四年)<sup>(9)</sup>ことなどである。この記念号が、スミスを各方面から論じた七つの論文を収録しえたことは、当時同文館によつて全九冊の『経済大辞書』が出版されはじめた(本書三六―七頁参照)こととともに、わが国の経済学界が、啓蒙的譚訳時代や外人教師時代をようやく脱し、新しい段階―大正期―に入る時機に立ちいたつたあらわれとも解されるであろう。

註(1) 簡単には堀経夫監修『経済思想史辞典』(創元社昭和二十六年)第九章「古典学派の学説の仏・独・米への流入」を参照

(2) 大塚金之助「経済思想史(要領)」(日本資本主義發達史講座所収) 岩波書店昭和八年・二〇―二五頁

(3) この点については河上肇「竹内法学士訳『富国論』」経済論叢大正十一年四月・一二〇頁参照

(4) 高橋誠一郎『書齋の内外』要書房昭和二十二年・二二九―三〇頁、同氏「経済学わが師わが友」『経済評論』昭和二十九年一月一―〇頁等参照

(5) なお内田義彦『経済学の生誕』未来社昭和二十九年・五頁の註(1)をも参照

(6) たとえば住谷悦治『日本経済学史の一齣』大畑書店・昭和九年、河合栄治郎『明治思想史の一断面』同昭和十六年など

(7) たとえば、二十年には『国家学会雑誌』と『國民之友』が、二十八年には『東洋経済新報』と『太陽』が發刊される。

又『国民経済雑誌』の発刊は三十六年、『三田学会雑誌』は四十年である。なお三十年代から大逆事件までの間、社会主義的な新聞や雑誌がさかんに刊行されたことも注意すべきである。

(8) 不変資本・可変資本の概念については、すでに山川均氏が四十年の大阪平民新聞社紙上に掲載した「マルクスの『資本論』」の中で解説していた(青木文庫版『森近運平・堺利彦集』昭和三十年・一九四頁)。又その頃同新聞主筆の森近運平が、その著『社会主義綱要』において、マルクスの価格論がスミス・リカードの「勤労説」を發展せしめたものであること、之に対して「セヴォン一派の最終效用説の真価は、スミス以前の需要供給説の上に出づる者に非ず」と論じていた(前掲書三六一―三八頁)。ことは、大正の後期にはじまるスミス価値論の本格的な研究に対する先駆的見解として、注目にあたいする。

(9) 本書によつて見ると、三田学会雑誌には、本号以来、昭和二十七年までに、約五十点のスミス研究が、ほぼ連続的に、多くの人々によつて発表されてきており(そのうち最近のものは遊部久藏・「生産的労働」について・二十七年五月)、福沢以来の学統をしめしている。

## 二

つきに大正期であるが、この時期に属する文献が掲載されているものの合計約二二〇、つまり明治期の三分の一の期間にその五倍以上の文献が発表されたことになる。だが前掲のグラフもしめしているように、前半の大正八年までにはわずか十五の文献が見られるだけで、明治の後期よりむしろすくない。それが大正九年以後になると、毎年鱈のぼりに上昇し、大正十二年には七十二という老大な数に達し、以後の三ヶ年もかなり多数の文献が生産されていることがわかる。これには、大正十二年がたまたまスミス生誕二〇〇年に相当したことが直接の動機となつていふことはいうまでもないけれども、より基本的な理由としては、第一次世界大戦後の内外の情勢が、わが国にもいわゆるデモクラシー時代を招来し、社会科学一般の研究が、マルクス主義の導入を中心として、一大高揚期に入

つたことが考えられなければならない。ところで今期に入つてはじめてわれわれが本書で出会う文献は、河上肇博士が大正二年三田学会雑誌に書かれたスミスの価値論に関する一文である。博士は明治四十年代にすでにスミスにしばしば関説しているが、この期に入つて、一そうたびたび筆をとり、大正時代のスミス研究の一中心をなしているとも見られるので、まず博士の諸労作をあとづけることから、今期の展望をはじめることしよう。

大正四年外遊からかえつた博士は、翌五年新聞紙上に「貧乏物語」を発表し、その翌年これを単行本として世に問うに際して、「経済学の開祖アダム・スミスの……画像を巻首に載せ、聊か追慕の意を表」している（同書序）が、本文の下篇（如何にして貧乏を根治し得べきか）の中でスミスの所説をとりあげ、利己心是認の思想によりはじめて経済学の統一的体系化に成功した次第をのべるとともに、その個人主義放任主義の理論的欠陥として、第一に富の増加のみを問題として分配の重要性を忘れていること、第二に貨幣で秤量した富の価値を直ちに人生上の価値の標準とした点をあげている。<sup>(3)</sup>さらに大正七年朝日新聞に掲載した「未決監」（これは同年刊行された『社会問題管見』に収録されている）においては、同様の趣旨をつぎのようにのべる、「思うに若し、経済の目的が単に富の生産を最大ならしむるに在るならば、経済政策の根本問題は、今より約百五十年前、既にアダム・スミスに依りて解決し尽されたりと謂い得らるゝ。乍併、経済学上の根本問題は、実は二つある。一は生産問題であり、二は分配問題である……生産の増加は果して如何なる程度まで分配の公正の爲め犠牲とせらるべきものなる乎、論じて茲に来る時、学者則ち窮せざるを得ず。此意味に於て現代の経済学者は皆未決監の中に在り。真乎決死の勇を鼓し、身を擲つて問題の解決に当る者、始めて斯の獄を破りて第二のアダム・スミスたるを得ん<sup>(4)</sup>」。ここではまだ、スミスの正統をつぐものこそマルクスであることは確言されていない。生産政策か分配政策かというような問題の立て方では、このよう

な結論をみちびき出すことがそもそも無理である。しかし翌八年『社会問題研究』をみずから創刊して、マルクス研究を精力的におしすすめて行つた博士は、同年行つた講演をまとめて出版した『近世経済思想史論』（大正九年）において、スミスからマルクスへの基本線をほほ明確にうち出すにいたり、それにともなつてスミス理解も一そう深まつてくるのである。<sup>(5)</sup> この前後にかかれた二論文、「マルクスの唯物史観に関する一考察」（八年）、「社会主義と個人的自由」（十一年）は、その成果のあらわれといつてよいであろう。<sup>(6)</sup> その後博士のマルクス研究は、蓄積論争や価値論争を通じて進行していつたが、十二年八月、従来の学史研究の総決算として『資本主義経済学の史的発展』が刊行され、その中で、これまでの博士のスミス研究も亦、文献学的諸研究をもふくめて、一応の総括をあたえられることになつた。しかるに、当時の博士のマルクス理解は、いわゆる価値人類犠牲説がしめしているように、いまだ人道主義的偏向から脱却しきつておらず、その点がまた『発展』の基本視角を制約しており、櫛田民蔵氏のきびしい批判をうけざるをえなかつたのである。<sup>(7)</sup> かくてわれわれは、この批判をうけ入れて更に前進した博士の最終的なスミス論を、『発展』の改訂版たる『経済学大綱』の下篇（改造社・昭和三年）に見出すのであるが、そこであたらしく増補された「スミスの労働価値説」の章には、大正十三年に発表された論文「スミスの所謂『眞実の価格』について」に見られるような人道主義的非歴史的色彩は、もはや全く見ることができない。

以上見てきたような河上博士のスミス研究の経過の中には、博士独自の個性が刻印されていると同時に、当時のスミス研究の主潮が反映されているといつてよい。事実この期の後半に続出した注目すべきスミス研究の多くは、マルクス経済学のわが国への本格的な導入との関連において行われたのであつて、この間の事情は、森耕二郎「アダム・スミスに於ける労働価値法則の妥当性に就て」に関する遊部久蔵氏の、また住谷悦治『唯物史観よりみたる

『経済学史』に関する田添京二氏の、また『剰余価値学説史』第一巻の翻譯に関する鈴木鴻一郎氏の諸解題がもがたつている如くである。そしてこれらの諸業績―舞出長五郎氏や久留間敏造氏のものも忘れてはなるまい―によつて、従来の研究水準は一段とひき上げられたのであり、同時にすすめられたリカード研究と相俟つて、古典経済学がわが国への移植に成功したのだつた。しかし一面これらの研究はいずれもいまだに端緒的乃至局所的で、基本的には正しい分析のメスをもちながらも、縦横にこれをふるつてスミスの全思想体系の解明をなしとげる力量をそなえるには、尚なさるべき多くの準備作業がのこされていた。そして、そのための貴重な礎石のかずかずが、これら以外の人々の手によつて、主としてスミスの哲學的基礎の研究のために―大正末期に激増した文献の全体からすればその数はかならずしも多くはないけれども―提供されていたことは、藤井健次郎・河合栄治郎・長谷田泰三・福田徳三・三浦新七の諸氏の論文に対する大河内・木村・出口・岸本・太田の諸教授の文献解題がしめしているところである。さきにくべたスミスの経済理論の科学的研究が、このような包括的な研究と適切に結合して、スミスの全体像に近迫するためには、しかし、経済理論の研究自体が、価値論乃至剰余価値論から、再生産論乃至蓄積論へと深まる必要があるし、一方スミスの生きた時代の基礎過程の研究がすすんで、その中から、政策家としての又歴史家としてのスミスの姿が全体的具象的にうかび上つて来なければならぬであらう。大正期からこれらの遺産と宿題とをうけついで、時代は昭和に入ることになるのである。

註(1) たとえば『経済学の根本概念』宝文館明治四十三年・八頁、『時勢之変』読売新聞社四十四年三五・九六―八・一四―四頁等参照

(2) 大正二年から四年にかけての外遊期間をのぞけばこの期の博士はほとんど毎年スミスについての文章を発表している。

向この期に発表されたスミス論の数において博士と比肩しうる人は、高橋誠一郎・竹内謙二の両氏である。

(3) 『貧乏物語』岩波文庫版一〇六一七頁

(4) 『社会問題管見』二五〇・二五九頁。この「未決監」を本書は洩らしている。なおこの文献は「書簡一通―スミスの独身生活」(本書六六頁参照)とともに、博士の評論集『西洋と日本』朝日新聞社昭和二十六年に収録されている。

(5) 『社会問題管見』は大正九年改版が刊行され、その際『貧乏物語』の一部が収録されたが、スミス論をふくむ下篇の部分は抹殺され、又初版に収録されていた「未決監」もはぶかれた。この間における博士の思想的变化をしめす一つの証左である。

(6) 前者は「アダム・スミスの必然論」という節をふくみ、大正八年十月『経済論叢』に発表され、十年『唯物史観研究』に「唯物史観と必然論」と改題して収録された。後者は、「スミスの所謂自然的自由の制度」という項をふくみ、十一年七月『社会問題研究』に発表され、同年十二月『社会組織と社会革命に関する若干の考察』に「社会主義制と個人主義的自由」と改題して収録された。この二論文に関する本書の記載には不十分な点があるので念のため。

(7) 「社会主義は闇に面するか光に面するか」『改造』大正十三年七月号(全集第一巻に収録また、戦後出た同名の評論集・朝日新聞社・昭和二十五年にも収録)、本書はこれにふれていない。

### 三

昭和期における社会科学の歴史は、一般に、(一)戦前、(二年―十二年)、(二)戦中(十二年―二〇年)および(三)戦後の三段階にわけて考えられようが、スミス研究についてもほぼこれが妥当することは、前掲のグラフからもうかがわれるところである。ところでその第一期であるが、この期のスミス研究は、それ以前および以後とくらべて、量的にはさして見劣りがするわけではないけれども、ユニークな労作にとほしく、全体としてやや不振であったという感じをいなむことはできない。この期の末尾にあらわれた中山伊知郎氏『スミス国富論』の解題において、

わが國のスミス研究史に関する覚え書(杉原)

大河内氏が、この研究の基本的立場には難色をしめしながら、「従来の多少ともマンネリズムに墮したスミス研究に対して清新の気を吹き送つた観がある」(一四〇頁)とのべているのも、このことを示唆するものである。その根本的理由としては、大正末期に高揚したデモクラシー運動も結局はこの国に根つきえず、ファシズムの抬頭にしながらされて行つた当時の社会情勢にこれをもとむべきであらうが、ヨリ具体的には、つぎの諸事情を考慮しな地ければなるまい。すなわち、当時のマルクス経済学の研究の重点が、革命の戦略規定につらなる現状分析に移行して、学史研究に媒介された基礎理論の深化をおこなう余裕にとほしかつたこと、又これに対抗して着々学界にその盤をききつつあつた近代経済学も、最近の文献の輸入と消化とに主力をそそぎ、学史研究にまで手をのばすにいたらなかつたこと、さらに外国においても、前世紀末から今世紀にかけての「アダム・スミス問題」をめぐる論争やキャンナンによる文献学的諸貢献の後には、スミスに関する新研究にとほしく、これらを一応消化したわが国の学界は、一九三七年にてたスコットの書物(2)をむかえるまでは、ほとんど海外から研究上の刺激をうけなかつたこと、などである。しかしもとよりこの時期においても、見るべき成果が全然なかつたわけでは決してない。波多野・堀・小泉の諸氏の労作は、それぞれに附された解題がしめしているように、いずれも地味ではあるが着実な成果をあげていたし、スミスの理論を循環論として整理した越村論文や、スミスの地代論を詳細に吟味した田中論文や、それに本書は浅らしているが、スミスの大学論をおそらくはじめ解説した大塚論文(4)「ジエームス・ワットとアダム・スミス」日本評論昭和十一年六月号・『解放思想史の人々』岩波新書・昭和二十四年に所収)なども注目すべき貢献であつた。そしてこの時期の終りに近くなると、次期において結実すべき研究の端的な業績がぼつ／＼姿をあらわしつつあり、又、これらを外からささえる貴重な仕事も、いろ／＼の分野で、徐々にすすめられていたのである。

昭和十二年に中国との紛争が再開されると同時に、わが国は準戦体制に入り、自由な学問研究のための諸条件は、社会科学の分野においてとくに悪化した。このような重苦しい雰囲気の中で、わが国のスミス研究の科学的伝統をきずきあげるのに貢献した諸教授は、つきつぎに大学を去つていった。しかるに、このような逆境にもかかわらず、むしろある意味ではこうした環境のゆえにこそ、この期におけるスミス研究は非常な高揚を示すのであつて、スミス死去五十年にあたる昭和十五年とそれにつづく数年の間に、劃期的な労作が続々と公刊され、研究史上最も注目すべき時期となるにいたつたのである。今そのうちの主なものだけをあげることにしても、つきぎの七つは逸することができないだろう。(一) スミス経済学の生成発展の過程を、スミスに即して内在的に、およびその地盤と背景とを通して外在的に、いずれも丹念に探究した大道安次郎氏の諸業績<sup>(5)</sup>、(二) 個人主義的経済倫理の本質と限界とを究明するためにこころみられた白杉庄一郎氏の『道德情操論』に関する一連の研究<sup>(6)</sup>、(三) スミスの思想を、歴史的理論的方法によつて総合的に把握しようとする著者の経済社会学的立場からとりあげ、これを生産力理論としてリストのそれと関連せしめて見ようとした高島善哉氏の著作、(四) スミスにおいては経済の倫理と論理とが内面的に結合している所以を、いわゆる「アダム・スミス問題」の吟味を通じ、又当時の歴史的現実との関連においてときあかした大河内一男氏の業績<sup>(7)</sup>、(五) 大河内氏と同様の問題意識に立つて、スミスの認識のモデルを禁欲的性格をもつ当時の「中産的生産者層」と規定し、それが資本主義の形成期においてはたした役割を歴史的に解明するとともに、スミスの重商主義批判の意義を再認識しようとした大塚久雄氏の労作<sup>(8)</sup>、(六) 明治(石川)・大正(竹内)・昭和前期(青野)の各時期の『国富論』全訳につぐ第四番目の完訳をこの時代に完成するとともに、当時のスミス研究に対する注目すべき論評(本書一七二頁)をものした大内兵衛氏の業績<sup>(9)</sup>、(七) 最後に、ケインズの視角から

わが国のスミス研究史に関する覚え書（杉原）

一六

スミスの理論（とくに『国富論』第二篇）に注目し、スミスキーカード—マルクスに対するスミスキー—マルサスキー—ケインズの系譜を設定しようとした高橋泰蔵氏の諸論文。<sup>(10)</sup>

このような多くの成果が集中的にこの時期に出現したのは決して偶然ではない。第一に考えなければならぬことは、明治以降多くの先人がきずきあげてきたわが国のスミス研究の高い伝統である。今期の冒頭すなわち昭和十二年に刊行された舞出長五郎氏の『経済学史概要』がその最もすぐれた総括をしめしているところの、この伝統をふまえてこそ、はじめてこの期におけるこれらの多様な業績の展開も可能であつた、ということは、本書をひもつくものにとつては容易に理解されるところである。だが、ヨリ直接的な動因として、われわれは、当時の研究者たちが当面したわが国の社会情勢、すなわち、戦時経済の進行とともに、社会の根本的再編成が、前近代的な要素を多分に残存せしめつつ同時に個人主義乃至自由主義的体制を否定しようとする方向へ強引におしすすめられる、ということからくる矛盾の激化、という事実を思いおこさなければならぬ。たとえ個人主義体制が超克さるべきものであるにせよ、その超克が正しくなされるためには、個人主義体制の本質を十分に把握する必要があるのである。しかも市民社会の建設がゆがんだかたちでおこなわれざるをえなかつたわが国ではことにその必要が大である、というのが、多くのスミス研究者に共通の問題意識であつた。それまでのいかなる時期においても、スミス研究が当時の時代的要求との関係を多かれすくなかれもつていたことは事実である。しかし、客観的科学的研究と主体的実践的意識とがこれほど緊密に結合してすばらしい成果をあげたことはかつてなかつたことであつて、この時期にいたつてはじめて、スミスの思想の日本への真実の移植がおこなわれるにいたつたといつても過言ではないであらう。<sup>(11)</sup>

しかしこの時期の研究を特色づけるものとして、同時にわすれてはならないことは、当時のスミス研究の多くが、大河内氏のことばをかりるなら、マルクス研究の「隠れ蓑」<sup>(12)</sup> だった、ということである。当時の苛酷な思想言論統制の下では、マルクスを公然と研究することは不可能であつたので、多くの人々は、弾圧の結果中絶のやむなきにいたつた日本資本主義の研究が、比較経済史や中小企業論やの形をとつてすすめられたと同じように、マルクス経済学の理論的研究の一階梯として、古典学派に関する学史的研究におもむいたのである。この点が、この期のスミス研究に、大正末期以後のそれとくらべて、著しくことなつた性質をあたえているのであつて、マルクス研究と一応独立してスミス研究がおこなわれたことは、一方、従来の研究の固定化を打破して新境地をひらくことに成功したというプラスの面をたしかにもつてはいたが、しかし他方、このような研究を、スミスリーカード―マルクスという科学的経済学の正統的系譜を深化するという本来の理論的作業とどう媒介するか、という仕事を、今後の課題としてのごすことになつた。この点に関して、わたくしは、田添京二氏が、高島善哉編『スミス国富論講義』(昭和二十五年)の解題によせて、戦時中の理論的遺産のもつ意義と限界とについてのべている箇所(本書二〇三―五頁)を、こののこされた課題をみずからはたすべき責任をもつた世代の発言として、十分の共感をもつてよむことができたのである。

註(1) この意味で中山氏の労作はわが国における近代経済学の歴史にとつても一つの記念碑的な作品であろう。ちなみに同じ十一年に東京でマルサスの『経済学原理』のリプリントが刊行されたことは、その後の近代理論的学史研究の動向からみて興味ゆかい。

(2) Scott, W. R., *Adam Smith as student and professor*, 1937

(3) ただ、ボナーの『スミス藏書目録』第二版が一九三二年に出版され、わが国でも東氏や小泉氏によつてその紹介文が登

わが国のスミス研究史に関する覚え書(杉原)

わが国のスミス研究史に関する覚え書(杉原)

一八

表された(本書二二八—三〇頁)。尙これには、大正八年新渡戸稻造氏によつて東大経済学部へ寄贈されたスミスの藏書の一部のリストも、河合榮治郎氏の報告にもとずいて記載されているが、この点については、戦後出版された東大所藏のスミス藏書目録についての大塚金之助氏ならびにベル氏の解題(本書二一一—一五頁)に閲説されている。

- (4) これと同じ題名で、同じ昭和十一年に大内兵衛氏が帝国大学新聞に寄せた一文『経済学散步』思索社・昭和二十三年所収)も本書は収録していない。

- (5) これは『スミス経済学の生成と發展』(昭和十五年)および『スミス経済学の系譜』(昭和二十二年)の二著にまとめられた。前者に対する大河内氏解題(本書五三—五五頁)参照。

- (6) これは『道徳情操論』の研究』(昭和十五年六月)より「個人主義経済論理の批判」(同十六年十月)——いずれも『経済論叢』所載——にいたる五つの論文よりなるが、最初の論文を本書はおとしている。

- (7) 大河内氏の別の論文「アダム・スミスと貨銀」(昭和十八年)——これは『スミスとリスト』の新版(昭和三十年)に収録されている——は、当時の氏の社会政策論と密接なつながりをもつものとして、『スミスとリスト』の旧版に収録されていた「生活理論と消費理論」(昭和十六年帝国大学新聞)——本書には掲載されていない——とともに、注目すべきである。

- (8) 大塚久雄氏の全労作は、当時およびそれ以後のスミス研究を大きく方向づけたものであるが、直接スミスに関係あるものとして、昭和十九年『世界史講座』に発表された「資本主義と市民社会」(『近代資本主義の系譜』(昭和二十二年に収録)は、あげられるべきであろう。ちなみに、戦後のものでは、「経済建設の実体的基礎」(『改造』昭和二十二年三月、『近代化の歴史的起点』同二十三年に収所)が、スミスをかかなり引合いに出している。すくなくともこの二つは、スミス文献として本書にも収録されてしかるべきであると考えられる。

- (9) 戦後『経済学散步』(前出)に収録されたこの論評が、いかなる意味で注目されるべきかについては、白杉庄一郎『近世西洋経済史研究序説』有斐閣・昭和二十五年一九四・二〇四頁、内田義彦『経済学の生誕』(前出)六頁などを参照。

- (10) これらは戦後『経済発展と雇傭問題』(昭和二十三年)に集録された。越村信三郎氏のこれに対する解題(本書一九四—五頁)を参照。

- (11) ミークは、最近の注目すべき論文、「マルクス主義社会学へのスコットランドの貢献」において、マルクス主義思想に對するイギリスの貢献は、決して古典経済学に限定されず、その根底にあるいわば古典社会学についても認められるべ

きであるとし、その古典社会学の形成に、十八世紀後半に發展したスコットランド歴史学派（スマイス・フアーガソン・ロバートソン・ミラーを代表者とする）が大いにあづかつて力があつたと説いているが、その際、当時の代表的な社会学者の大部分がなぜスコットランド——イングランドよりもむしろ後進的な——から出たのか、という問題を提起し、これをとく鍵を、当時のスコットランドの社会事情、すなわち、第一に、経済的發展のテンポが急速であつたこと、第二に、發展段階のことなる諸地域を容易に対比しうる利点があつたこと、に求めてゐる。（Ronald L. Meek, *The Scottish Contribution to Marxist Sociology, Democracy and the Labour Movement, 1954, pp. 98f.*）。スマイスの思想の母胎となつたこのような社会事情とある意味では相似の条件をもつたわが国の戦中戦後において、彼の思想が、一個の歴史科学として、全体系的にとりあつかわれはじめたということは、興味ふかい。

(12) 大河内一男『欧米旅行記』時事通信社・昭和三十年・二三—一頁

## むすび

しからば、このような課題に、戦後の新段階におけるスマイス研究は、どのようにして立ちむかつて行つたであろうか。昭和二十七年までの文献を本書によつて通観しても、めぼしい成果がすでに一つならずあがつていることに気づかせられる。しかし、総じてわが国の学界が戦時中の空白をとりもどすためには、かなり長い歳月をまたなければならなかつたし、戦後のヨリ複雑な諸条件の中で、あたらしく提起される問題を正當に処理する能力を蓄積するためには、さらに多くの時間を必要としたのだつた。されば、新段階を特色づける包括的な仕事は、むしろ二十年以降にあらわれつつあるのではないであろうか。そしてそれらの諸業績を展望して、スマイス研究の、さらには学史研究一般の現代的課題を反省する時点に、現在のわれわれは立つてゐるといつてよいであろう。しかし、この点の考察は、他日を期することにしよう。ともあれ、まさにこの時点において、本書が刊行された意義は大きい。本稿をむすぶにあつて、関係者の労苦に対し、あらためて深い感謝の念を表したいと思う。（一九五六・五・一四）